報告した．そこで，今回腋窩・胸骨旁および骨盤領域の RI リンフォグラフィーに ^{99m}Tc-フチン酸を用い，その臨床的有用性を検討した．

対象は腋窩・胸骨旁および骨盤領域についてそれぞれ5例，3例，15例で，その多数例で頸部を含めた複数の領域の RI リンフォグラフィーを同一症例で同時に行なった．また，対象の内腋窩の1例と骨盤領域の5例では，Kinmonth 法によるX線リンフォグラフィーが前後して施行された．方法は ^{99m}Tc-フチン酸 3～5 mCi/0.3～0.5 m*l* を腋窩に対する両手背皮下に，骨盤領域に対し両足背皮下に，また，胸骨旁に対し劍状突起両側胸壁内に注入し，さらに内腸骨リンパ節像を得る目的で対象2例において子宮頸部に注入した．RI 注入後5時間前後に，各領域のリンパ節像をガンマカメラ（東芝 GCA-401）で撮像した．

子宮頸部へ注入後まもなく明瞭な肝影を認めた1例を除けば，全例とも病変部を的確に示唆したリンパ節像を明瞭に描画した．病変リンパ節は大部分の例で欠損像または菲薄像として描出され，一部の例で腫大像として描画された．一方，RI リンパ節像とX線リンパ造影像とは数，大きさあるいは分布の点でよく一致する結果を得た．

8. 核医学検査が診断に有用であった Pericardial Cyst の一例

大澤　保　延澤　秀二
菅野　敏彦　藤井　忠一
広瀬　一年　小林　聡
（県西部浜松医療センター・放科）

心嚢の腫瘍は，まれな疾患とされている．われわれは，心嚢嚢腫例を経験したので，症例を供覧し，文献的考察を加えて報告した．

症例は27歳の女性．当センターに入院するまで全く自覚症状なく，会社の検診で心陰影の異常を指摘され，心肥大といわれた．昭和52年10月，某院を受診し，心嚢嚢腫の疑診で当センターに紹介された．入院時一般検査では，異常を認めなかったが，心濁音界が左方に拡大していた．胸部X線写真では，左心横隔膜角部に均一構造の腫瘤状影を認めた．X線透視検査では，腫瘤部は呼吸および体位変換によりわずかに位置の変化を認めたが，心拍動と一致した拍動は認めなかった．タリウム心筋スキャン，ガリウムスキャン，RI アンギオでは異常を認めず，心プールスキャンで腫瘤部は avascular area として描画された．CT 検査では，心臓影に接してその左側に心臓より low density の腫瘤状影を認め，血管造影では左室外側縁が左方より軽く圧迫されていた．以上の各種検査の結果，左室近くの心嚢嚢腫と診断し開胸術を実施．左室心嚢下部前方に 8.5×7.5×5.5 cm 大の腫瘤が存在し，腫瘤と心嚢腔との交通は認められなかった．摘出した腫瘤を組織学的に検索した結果，結合織性の嚢腫と診断された．

左横隔膜角部に腫瘤影が存在する場合には，心筋スキャンにて心筋自身の変化を，また，ガリウムスキャンにて悪性腫瘍の可能性を除外する必要があると思われる．

9. 甲状腺機能亢進症の治療経過中の血中 rT_3 値について

分校　久志　一柳　健次
久田　欣一
（金沢大・核）

血中 rT_3 ラジオイムノアッセイの基礎的検討と他の甲状腺機能検査値との相関については前回報告したが，今回，甲状腺機能亢進症の治療経過に伴う血中 rT_3, T_3, FTI, T_3/rT_3 比の変化について検討した．

対象は，未治療甲状腺機能亢進症の8例で，うち4例は MMI，2例は ^{131}I と MMI の併用，1例は PTU，1例は ^{131}I と propranorol 併用治療を行なった．経過観察期間は 1～5 カ月であった．

MMI 投与例では T_3, rT_3 はほぼ平行して減少したが T_3/rT_3 比は治療経過に伴い増加し，約4～8 と高値を示した．しかし，この値は正常例にお

Presented by Medical*Online